



# 滋賀里百穴

大津市<sup>しがきと</sup>滋賀里の史跡・崇福寺跡<sup>すうふくじあと</sup>区域内にある群集墳は、滋賀里の<sup>ひがし</sup>百穴として古くから知られています。ここは、古墳の分布状況が調べられただけで、崩壊した1基を除いて、ぜんぜん発掘調査が行われていません。しかし、その周辺には発掘調査の行われた古墳が数多くありますので、その調査結果も参考にしながら、百穴について考えてみましょう。

## 位置と現状

まず百穴の位置ですが、この群集墳は、滋賀里の集落が尽きて山となる所、溪流に沿った南斜面にあります。百穴のような群集墳は、4ページの遺跡分布図でわかるように、北は坂本から南は皇子山付近まで、湖岸の小平地



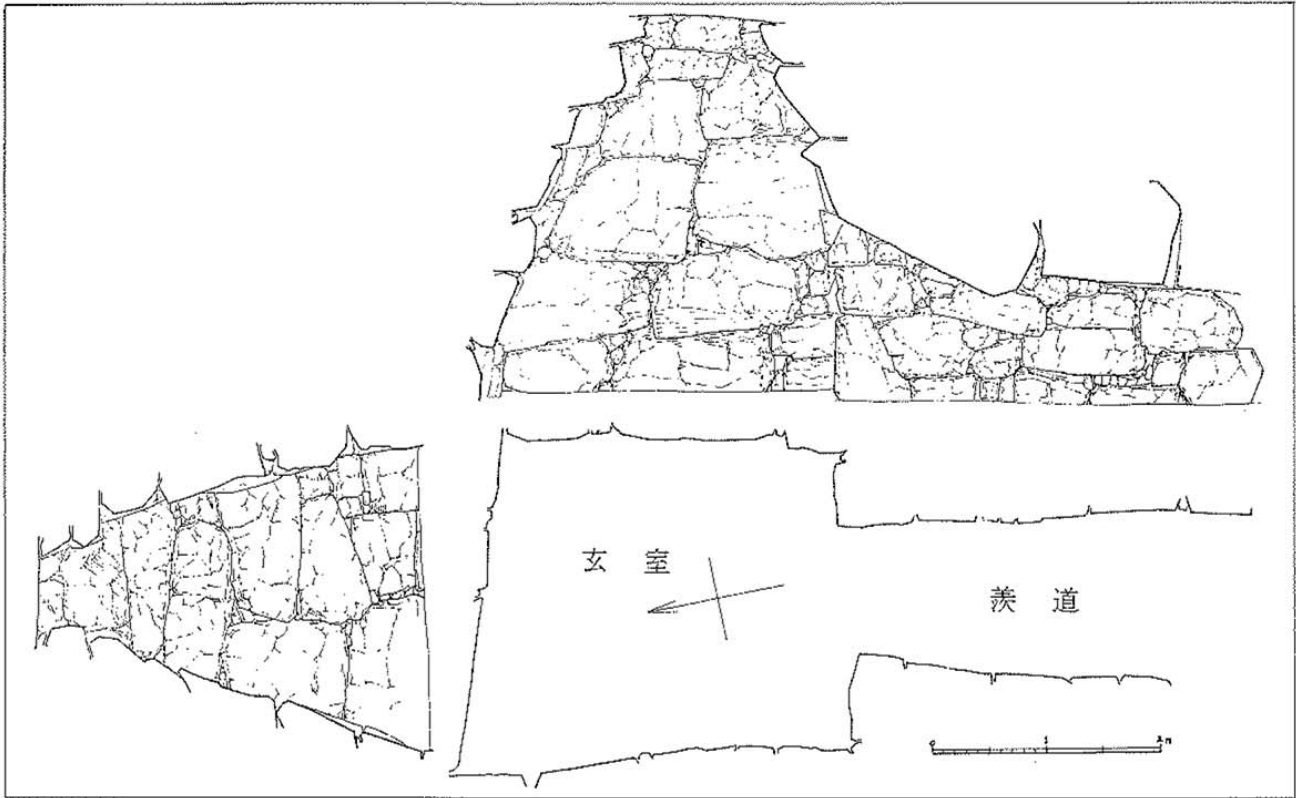
百穴の一古墳

に臨む西側の山の各所に造られています。もとは、山の斜面だけでなく、その東に続く<sup>しゅう</sup>扇状地にもあったようですが、扇状地のものはほとんど無くなっています。百穴は、これら数多い古墳群の中の一つだと言えます。

百穴では、現在60基余りの古墳が確認されています。中には、石室の入口がのぞいているものもありますが、墳丘が盛り上っていたり、逆に天井石の落ちこみや脱落のため、墳頂部が凹んでいたりにしていることによって、古墳であることがわかるものが多いのです。

これら百穴を含む一帯の古墳群は、その分布状況からみて、琵琶湖岸を生活の場所として、ここに集落を造った人々の共同墓地であることがわかります。また、この地は天智天皇の大津宮が営まれたとされている所ですが、これらの群集墳の造られた時期が近江遷都の百数十年前から始まることから、この古墳群の持つ意味は特に重要となります。遷都の背景となったこの地の政治力や経済力など当時の社会構造について、これらの古墳が何を物語っているかを究めることが必要なのです。

普通、群集墳の古墳は1世代の家族墓の性格を持っているので、100年余りの群集墳の歴史からみて、当然3世代前後の墓が一つのグループを造っていると考えられます。したがって、一見雑然と営まれているような古墳でも、グループ分けが可能となり、その群集墳が何家族の共同墓地であるかが推測されるのです。もちろん、内部を調査することによって相互の比較がなされなければ、正確な結論づけは無理でしょう。しかし、群集墳をこのような立場で眺め、さらに広く周辺の古墳



塚穴古墳実測図

群を調べることによって、この地の歴史や社会を考えることは大切なことです。百穴についても、このような研究が今後なされなければなりません。

#### 周辺古墳の調査結果

百穴では、その内部の状況がわかる古墳は数例しかありません。その一つに、羨道部がこわれて玄室が露出し、側壁の石の積み方や室底の形がわかり、しかも、まれにしか存在しない石棺が見られるものがあります。

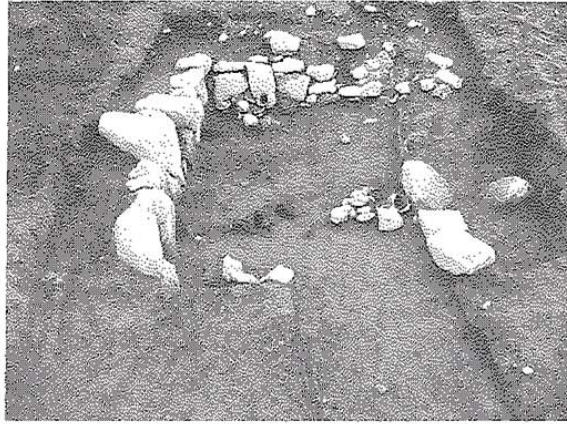
しかし、周辺の古墳の中には、道路建設や宅地造成に伴って調査された古墳も多く、また、石室内の状況がわかるものも二・三あります。現在、中に入ることができる古墳には、坂本の塚穴古墳や、百穴のすぐ北にある大きな熊ヶ谷の古墳があります。塚穴古墳は、羨道の前面が一部こわれていますが、他の部分は完全に残っている古墳で、先年、県教育委員会が石室の実測をしましたので、実測図の一部を載せて参考に供しましょう。この図でわかるように、この地の古墳は他地方のものに比べ、石室の底面が正方形に近いことが認められます。中には、大通寺裏山3号墳のよ

うに、底面がむしろ横長のものもあります。このような玄室の形は、側壁の積み方にも影響し、前後左右からの持送りが大きくなって、天井石は小さな1石か2石のものとなります。これは、副葬品のかまど形土器セットとともに、朝鮮半島の葬法が影響した特殊なもので、被葬者が半島からの渡来系の人々であることを示すものであると考える学者もあります。

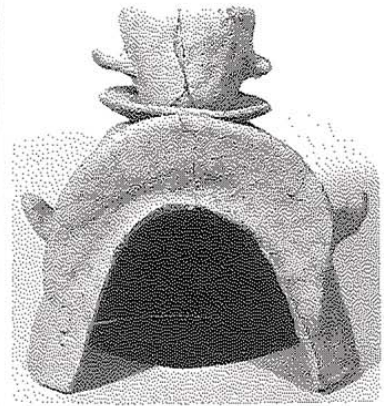
次に、副葬品であるいわゆるかまど形土器セットについて考えてみましょう。周辺の古墳の調査結果によると、副葬品のわかる古墳では、殆んどと言ってよいほど炊飯具のミニチュア（小型の模型）が含まれていました。これは、火をたくかまど・湯を沸かす釜・その蒸気で米をむす甑の三つがセットになっているものですが、そのほか鍋が含まれていることもあります。このセットは、実用品ではなく、副葬品として作られたものですが、大通寺裏山3号墳のような大きい古墳には、大型の須恵器とともに、実用に耐えられるようなかまどなどの土器が副葬品として出土しました。このかまど形土器セットは、他の土器



福王子2号墳出土  
かまど形土器セット



飼込5号墳



飼込5号墳出土  
かまど形土器セット

類と異なって、ある特殊な地域だけに出土するようで、さきに述べた石室の構造とともに、半島の風習が伝えられたものとして、被葬者を考える一つの手掛りとなっています。なお、この種のかまどを韓かまどと呼んでいるのも注目すべきことでしょう。

#### む す び

この辺は、天智天皇の大津宮があった地であるとされていますが、近江遷都とこの古墳群とはどのような関係にあったのでしょうか。まず、この地の古墳群が大規模であることに注目しましょう。古墳の数が多いのは人口が多かったことを示します。しかも、古墳のすがたから半島よりの渡来氏族との関係がうかがえます。このことは、大陸文化の渡来を示す別の証拠である寺院の分布とも一致します。

ここより北の堅田・和途<sup>わに</sup>方面も一大古墳地

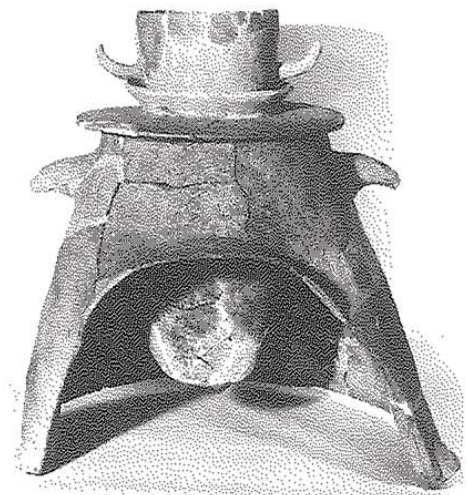
帯ですが、ここは、和途系の氏族と言われる小野氏や真野氏等の根拠地であったようです。したがって、この地は、まず古代の有力な氏族である和途系の人々によって開かれ、次いで、渡来系の大友氏や錦氏<sup>にしき</sup>等がさらに開発を進めた結果、交通・経済上の重要な地点となったのでしょうか。逢坂山を越えて近江に都を遷すことは、当時としては大事業でしたが、それが敢行されたのも、その背後に大きな政治的・経済的な基盤があったからでしょう。その一端を、これらの古墳群は物語っているのではないのでしょうか。

わたくしたちは、古墳の集まりを単なる古代の一現象として見るだけではなく、そこからいろいろと古代社会を復元し、それらの持つ意義を考えなければなりません。

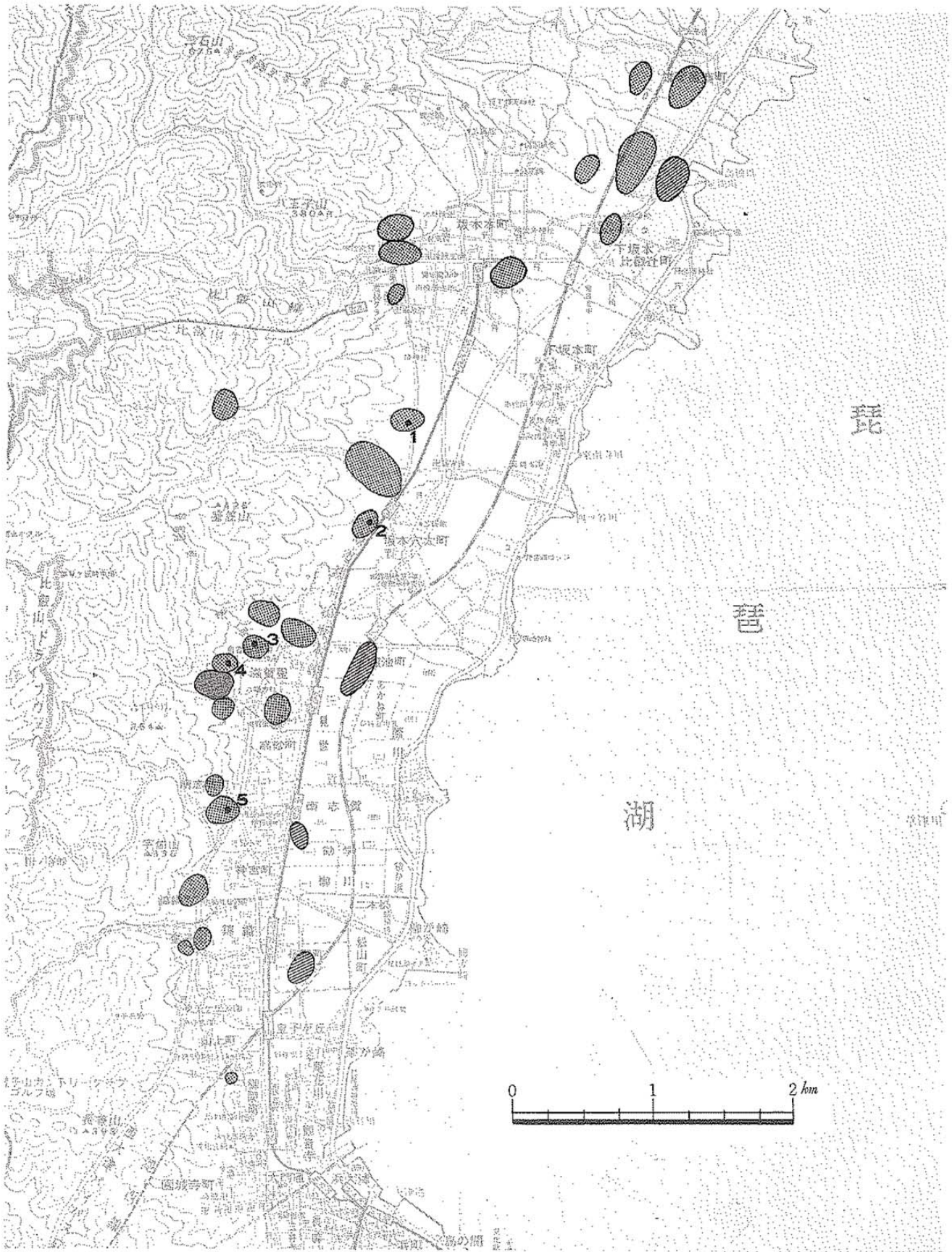
(西田弘氏提供)



大通寺裏山3号墳



大通寺裏山3号墳出土かまどセット



大津市北郊古墳時代遺跡方布図

● 古墳群 ● 調査された古墳時代生活遺跡（住居・方形周溝墓等）

本文等に出る遺跡の位置

- 滋賀里百穴 1. 塚穴古墳 2. 飼込5号墳 3. 大通寺裏山3号墳
- 4. 熊ヶ谷1号墳 5. 福王子2号墳